

正統仏教としての他力主義

他力主義と自力主義

他力主義＝外在主義(eksternalism)：自分の外部に善なるもの・肯定されるべきものがあり、自分の内部にはない、という考え方。したがって、善をなすことはあってもそれは縁にすぎない。すべての衆生は平等に「罪惡生死凡夫」として、**正統** 絶対他者の力によって残らず救済される（往生すると信ずる）

自力主義＝内在主義(internalism)：自分の内部に善なるもの・肯定されるべきものがある、という考え方。したがって、悪をなすことはあっても、それは**異端** 客塵煩惱の所為である。自己の内の靈的な力（仏性、如来蔵、菩提心）によって、自己を煩惱から解放すること（解脱・成仏）を目指す。苦行主義、作善主義。

（注意）浄土門（他力門）と聖道門（自力門）を＜包摂＞するのが自力主義＝顕密仏教。（例：源信は自力主義、法然は他力主義）

仏教は仏説教か成仏教か

仏教とは＜仏の説いた教え＞であるとともに、＜仏に成る教え＞でもある、という定義は誰が言い出したのか？

「仏教は、字義通り、仏陀の教であるが、同時に、又、仏陀に成る教である。勿論、仏教の或る部門に於ては、必ずしも、仏陀となる教とはせられて居ないこともあるが、…」（宇井伯寿『仏教思想研究』）

仏教 = buddha-śāsana / buddha-vacana / buddha-dharma / bauddha

（漢訳仏典においては、「仏教」「仏法」「仏道」）

buddha-śāsana = "the commandment or religion of Buddha"(仏陀の掟あるいは宗教、R.C.Childers)もしくは、"instruction or teaching of the Buddha"(仏陀の訓令または教え、R.Giebel), "the doctrine of Buddha"(仏陀の教義、M.Müller)

buddha-vacana = 仏陀の言葉・表現

buddha-dharma = "the Buddha's own and special dharmas"(仏の特有な性質、Conze)

bauddha (＜buddha、仏に関する、仏に属する、仏教徒、仏教の教説)

Buddhism is that which was taught by the Buddha, and Buddhists are those who affirm the validity of these teachings. (Kerry Trembath)

（まとめ）仏教が成仏教でもある、というのは、宇井博士が、インドの通俗的習慣に起因する多仏思想を取り入れた大乘仏教に基づき打ち立てた独自説であり、宇井博士の影響力の大きさから、その説が無批判に継承されている。

往生の教と成仏の教

一般的にいえば、他力浄土教においては＜成仏＞を説かない。成仏するにしても、あくまでも浄土に往生した後、気の遠くなるような時間を経た後の話である。＜成

仏>を直接の目的としない浄土教が特殊な仏教、なのではない。逆に、<成仏>を現生で実現できると言う方が、あまりにも楽天的すぎる。

「だれもが仏になることができる」と釈尊自身が述べているわけではない。上座部の伝統では、仏陀は釈尊だけ。仏教の通俗化の過程で、仏教の覚りがヒンズー教の解脱と同一視され、さらに涅槃・成仏という観念が広まったと思われる。

菩提心をめぐって～法然vs明恵

「菩提心」(bodhi-citta)：大乘仏教特有の用語。特に利他を強調した求道心をいう。菩提心は大乘仏教の菩薩の唯一の心で、一切の誓願を達成させる威神力を持つと考えられた。密教ではすべての美德の成立する根本心とした。(Wikipedia)

仏教の正統説では、citta(心) =manas(意) =vijñāna(識)であるが、菩提心を強調する場合は、心意識別体説に立つ。

法然：菩提心無用論／選択(排他)主義／平等主義

「上輩の文の中に念仏の外にまた捨家棄欲等余行あり。中輩の文の中にまた起立塔像等余行あり。下輩の文の中にまた菩提心等の余行あり。(中略)しかるに本願の中にさらに余行なし。」「ただ称名念仏の一行をもってその本願としたまえるなり。」(選択本願念仏集)

⇒人間はすべて平等に罪惡生死の凡夫であって、菩提心などは存在しようがない。称名念仏だけが救われる道である。

明恵：菩提心中心論／包括主義／差別主義

「菩提というのは、即ち是仏果にして、一切智智なり。心というのは、此の一切智智に於て希求の心を起こすことなり。此れを指して菩提心という。一切の仏法はみな此の心に依って生起することを得。」

「根機は万差にして教門は多種なり。或いは愚鈍にして(中略)此の如き類に對しては称名一行を勧進すべく、必ず余行を勧むべからず。」

「夫れ仏法は是一味にして、終に菩提に歸す。汝の邪法は是別法にして、菩提心を隔つる故に、正道に相應せず、(中略)汝の門弟は是別衆にして、解行人を隔別するが故に、終に涅槃に歸せず。その過、豈に破僧罪に同ぜざらんや。」(摧邪輪)

⇒劣機には称名念仏の一行が、勝機にはそれ以外の行(觀想念仏、坐禪、真言etc)が相應しい。それらをひっくるめて仏法はあり、すべては菩提心から出発する。菩提心を認めず、称名だけに偏執する者は大罪である。

親鸞：二種菩提心論(教行信証、236-237頁) ⇒一般的な菩提心理解を否定

論点

(1)無我 vs 菩提心=法(dharma)の因(hetu)および基体(dhātu)⇒如来藏

(2)選別(vibhāśa)・選択(pravicaya) vs 本覚・包括主義・和・秩序

(3)平等主義 vs 差別主義・作善主義・苦行主義

信仰の三つの類型 (cf.キリスト教の信仰)

śraddhā (信、信心、正信、淨信、敬信) = 仏道の出発点

「仏法の大海は信を以て能入となし、智を以て能度となす」 (大智度論)

「仏の言葉と想いを信ずる人々の福德は(膨大な布施よりも)なお多いであろう。なぜならば、信こそは世の人々にとって極楽に到達するための根本である。」

(無量寿経サンスクリット本、魏訳には欠落)

prasāda (淨信、澄淨) = 歓びを伴った信

「いかなる衆生であれ、かの無量光の名を聞き、聞き終わって、たとえ一度の発心であろうとも、淨らかな信を伴って、心の底から発心する者たちは、みな正覚から退かない位に安住している。」 (無量寿経サンスクリット本、魏訳では「諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心廻向 願生彼国 即得往生 住不退転」)

adhimukti (信解、勝解) = 知的な理解を伴った信

「わたしは、聖者の言葉を聞いてますます信ずる (pasāda) ようになりました。目覚めたひとは、心のおおいが開かれ、心は習熟し、しかも叡智をもっておられます。(中略) どこにも譬うべきものがなく、打ちまかされることもなく、動かされることもない境地に、わたしはたしかにおもむくことでしょう。これについて、わたしには疑いはありません。このように、わたしの心が信じ了解し (adimutti) ていることをご承認ください。」 (スッタニパータ1147,1149)

道元における他力

「ただわが身をも、心をも、はなち忘れて、仏の家に投げ入れて、仏のほうより行われて、これにしたがいもていく時、力も入れず、心も歎費(つい)やさずして、生死をはなれて、仏となる」 (正法眼蔵・生死)

「仏道を習うと言うは自己を習うなり。自己と習うというは自己を忘るるなり。自己を忘るるというは、万法に証せらるるなり。(中略) 自己をはこびて万法を修証するを迷ひとす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり。」

(以上、「正法眼蔵・現成公按」)

一遍における他力

「自力他力は初門の事なり。自他の位を打捨て唯一念仏になるを他力といふなり。熊野権現の『信不信をいはず。有罪無罪を論ぜず。南無阿弥陀仏が往生するぞ』と示現し給ひし時より、法師は領解して、自力の我執を打捨てたり。」

「念々の称名は念仏が念仏を申なり。」

「念仏といふは南無阿弥陀仏なり。もとより名号即往生なり。」

(以上、「一遍上人語録」)

一遍は、法然・親鸞よりも他力を徹底した。しかし、過度の他力の徹底は、神秘主義・体験主義・人間不在であり、さらに梵我一如に通じる。これは、親鸞がぎりぎりのところで、「信心を要とす」(歎異抄)として人間の立場を確保した、あるいは道元が「修証一如」として修業の必要を強調したのと対照をなす。

浄土教（他力思想）は梵我一如か？

梵我一如とは、

自己と絶対肯定されるべき本源とは一体
ゆえに、自己もまた肯定されるべき存在

という思想をいう。しかるに、仏教は自己否定（無我）の宗教であるから、梵我一如とは対立する。他力主義はこの延長線上に、自己否定と、自己の外なる絶対他者 [das Ganz Anderes (Rudolf Otto)] としての阿弥陀仏への帰依を説くものである限り、梵我一如とはやはり対立する。

しかし、他力を極限まで徹底すると、阿弥陀仏は絶対者 [das Absolutes] となり、すべてが阿弥陀仏のはたらきに解消されてしまう。

キリスト教の異端とみなされるグノーシス主義、イスラム教におけるスーフイズムなどの神秘主義と、極限的絶対他力は相通ずるといえる。

グノーシス主義：人間の本质と至高神とが本来は同一であることを認識（グノーシス）することにより、救済、すなわち神との合一が得られると説く。呪術や占星術などの密儀を積極的に取り入れた。

スーフイズム：イスラム教神秘主義。コーラン読誦やジクル（称名）儀礼などの修行実践を通して、神への接近を求める。内面重視、宗教体験強調、苦行禁欲、イスラム法無視、呪術性を特徴とする。

空也・一遍の浄土教が踊り念仏によって宗教的エクスタシー（法悦）を得ようとするのは、スーフイズムと同じ。また、グノーシス主義が梵我一如のキリスト教版であることは明らか。

反「愛国心」としての仏教

次のような言明：

「自分を愛せない人は他人を愛せない。同様に、自分の国を愛せない人は他国を尊敬することを知らない。」「日本人でよかった、日本に生まれてよかった、と思える子どもを育てなければならない。」

いわゆる〈自虐史観〉に対するアンチテーゼとしての〈愛国心〉と仏教は根本的に対立する。

仏教では、〈愛〉（仏教の言葉では〈慈悲〉）は他者に向けられるものであって、自分に向けられる場合は〈我執〉である。そしてこれは否定されるべきものである。

慈悲 = maitrī (友情・共感) + karunā (呻き)

したがって、仏教は「自分を愛さず他者だけを愛する」ことを教える。そして、国や民族とは自我が拡大されたもの（自己の延長）に他ならないから、日本人である私が日本人や日本国を愛するのは仏教に反する。

「自己を愛してはならないと思っても、常に自己を愛していることは確かであるし、日本を愛すまいと考えても、日本を愛してしまうことは避けられない。しかし、仏陀の教えは絶対である。それ故、私の結論は次の主張である。『仏教徒は日本を愛してはならない』」（松本史朗『縁起と空』）